

年間第十二主日

2016.6.19

ルカ 9・18-24

今日の福音は、イエスの弟子となって、イエスのお側近くにあつて、押し寄せてくる人々の求めに対応する弟子たちの多忙な日々を節目を画することになった、イエスと弟子たちとの対話を伝えています。ルカ 9 章の今日の場面の直前には、イエスに遣わされた宣教の旅から戻って来た弟子たちがイエスに報告した後、イエスに連れられて人目を避けるようにベトサイダという町に行ったことが語られています。けれども、そこにも五千人を越える大勢の群集が集まって来たので、イエスはその人々を迎えて、福音の教えを宣べ、病気の人たちを癒された上に、五つのパンと二匹の魚を弟子たちに配らせて、その人々の飢えを満たしてくださったのでした。イエスの弟子となって、イエスに従う弟子たちの日々はこのような日々であったのです。

そのような日々の中にあつて、今日の福音の場面はイエスの祈りによって始まります。弟子たちの側で、ひとり神に祈るイエスの姿が弟子たちに休息のときを与えます。自分たちの側で祈っておられるイエスとともにいることによって、弟子たちは自分たちを追い立てる日々の務めから解放されているのです。福音書の中の弟子たちがつき従ったその同じイエスを信じているわたしたちにとって、このミサが、あの時弟子たちが味わったであろう憩いのひと時となることを願いたいと思います。このミサに集うことによって、イエスを信じる者として生きているわたしたちのそれぞれの日々が、イエスの弟子としての日々であることを悟ることが出来る恵みを願いたいと思います。

今日の福音のあの時、イエスは弟子たちに問いかけられたのでした。「世間では、人々はわたしのことを何者だと言っているか」。そして、「それに対して、あなたたちはわたしを何者だというのか」。この問いによってイエスは弟子たちに、彼らがそれまでの生活の全てを後に残して、イエスのあとにつき従って来たイエスの弟子としての旅路を振り返らせておられるのです。「何を思って、何を期待して、あなたたちはわたしの後に従って、わたしとともに歩んで来たのか。」イエスはそう問いかけておられるのです。「周りの人々が何と言おうと、わたしたちはあなたがメシアであると信じたから、あなたの後に従って、今までこうして歩んできたのです。」ペトロは皆の思い代弁するようにこう答えます。彼らを弟子として召し出されたイエスは、人々への奉仕に明け暮れるイエスに従うことの疲労の中にある弟子たちに、イエスに従って歩んできた彼らの旅路を振り返らせてくださるのです。何のためにここまでイエスとともに歩んで来

たのか、そのことを弟子たちに再確認させてくださるのです。そしてまた、そのイエスは今日の福音を通して、イエスを信じる者たちとされたわたしたちにも、信仰者として歩んで来た自分の人生の旅路を振り返るよう招いておられるのです。

「あなたはメシアです。」という今日の福音のペトロの信仰告白は、イエスと出会い、イエスに呼ばれ、イエスの弟子として歩んで来た弟子たちの歩みの一つの到達点をなしています。イエスとともに歩んで来て、イエスが語る福音のみことばにお側近くから耳を傾け、イエスが行われる驚くべき奇跡のみわざの数々を目の当たりにしてきた弟子たちが到達した、イエスに従う弟子たちの心のうちに熟したイエスへの信仰の到達点を今日のペトロの信仰告白は示していると言えます。

そのようなペトロの信仰告白に応じて、弟子たちとともに歩み、弟子たちをここまで導いてくださったイエスは、ご自分の祈りの中に弟子たちを招き入れることによって、弟子たちがそれまで到達した人生の歩みを越えて、更にイエスとともに歩み続けるべき、新たな人生のステップを切り開いてくださろうとされるのです。

「あなたがたがつき従って来た、人の子であるわたしは、必ず多くの苦しみを受け、ユダヤの指導者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている」これが、弟子たちの側で祈っておられたイエスはその祈りの中で確認された、父なる神のみ旨なのです。イエスはそのような父なる神のみ旨を受け止めて、今や十字架の道へと進み行こうとされているのです。そしてそのイエスの後につき従う弟子たちにも、御自分が進み行く道の行く手を指し示し、弟子たちの覚悟を求められるのです。

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」。イエスがそのみあとに従う弟子たちに求めておられる第一の要求は、自分を捨てることです。このようにしてしか、わたしたちも自分の新たな人生のステップに踏み出すことは出来ません。このことは、イエスに言われるまでもなく、わたしたちもそれぞれの人生の経験を通して知っているはずのことです。独身の気楽さを捨てる覚悟が出来なければ、結婚に向かって踏み出すことは出来なかったはずです。子育てに追われることのない、自分たちだけの生活を楽しむゆとりを捨てる覚悟が出来なければ、親となる喜びを知ることではできなかったはずです。人生の節目を迎え、新たなステップに踏み出そうとするわたしたちをその都度、弟子たちに対してそうされたように、イエスのご自分がたどられた十字架の道へと招いておられます。イエスにとっての十字架は、仕える者となって人々のために生きたイエスの愛の生き方の極致の姿です。自分のためではなく、愛をもって人々に奉仕して生きる生き方を貫け

ば、自分の全てを投げ出し、与え尽くすことにならざるをえません。イエスのあの十字架をイエスが受け止められたように理解しようとするれば、それは決して、イエスの運命を襲った悲劇の死ではなく、イエスの人生がそこに極まる、イエスの生き方の到達点であることが分かるはずです。十字架を目指して歩まれるイエスは、そのような生き方へと弟子たちを招き、わたしたちを招いておられます。それが、父なる神によって、人の子となられたイエスに託された使命であり、そのイエスを信じて、イエスの弟子として生きるわたしたち一人ひとりに託されたわたしたちの人生の使命だからです。そのような生き方の到達点としての十字架こそが、わたしたちの人生の最終目的地である永遠のいのちに至る復活への入り口となるのです。

今日の主日、わたしたちの上を流れる一週間ごとのこの節目の日に当たって、わたしたちの生き方を振り返り、イエスに従う者たちとしてイエスが指し示された新たな目標を見定めることによって、イエスに力づけていただきたいと思えます。そのような思いに結ばれて、週の初めの日のこのミサをおささげいたしましょう。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高